

■ 特別寄稿論文

人間関係科教育が試みたこと

大橋 嘉男
(南山短期大学学長)

まえがき

2000年(平成12年)4月、南山短期大学人間関係科は南山大学へ転出し、大学の「人文学部心理人間学科」として発足した。また、それに伴って、南山短大の「人間関係研究センター」も大学に移行されて、「南山大学人間関係研究センター」として新しい歩みを始めた。

この度、大学の「人間関係研究センター紀要」の発刊に当たり、同センターの母体であった南山短大の「人間関係科」と「人間関係研究センター」の発展の歴史を振り返ることによって、人間関係科教育の原点を想起することは、新学科と同センターのこれからの発展のためにも意味があるのではないかと考え、あえて学科創設とセンター設立の経緯と目的について記してみたい。

人間関係科創設までの経緯

南山短期大学は1968年に英語科一学科の短期大学として創立された。当初は南山高校女子部の一部を間借りしてのスタートであったが、71年に現在地に新校舎が完成されるのを見越して、新学科「教養学科」の増設案が持ち上がって、増設準備委員会が置かれ理事会にも提案されたが、この新学科案は諸般の事情によって取り止めとなった。

しかし、71年に入って、新学科増設案が再び浮上し、「人間の尊厳のために」の教育目標を掲げる南山学園に相応しい特色のある学科を研究検討することとなった。そして、その段階で、立教大学キリスト教教育研究所(以下JICEという)が行っているような「体験学習の方法」を採り入れた、「人間関係学科」の設置が提案され、検討の後、「人間関係科」という名称と共に新設学科の構想が策定された。その構想の概要はつぎの通りであった。

1. キリスト教的な人間理解を基礎とした学科であること。
2. 人間行動の生物学的・心理学的・社会学的な理解に止どまらず、哲学的・宗教的理解をも養うこと。
3. 単に知識を詰め込む方法ではなく、将来の実践に連なり、社会でリーダーシップを発揮できるような学習であること。
4. 全体が一つの目的に統合されている学科であること。

この新設学科構想に対して、当時のボルト学園理事長から次のようなヴィジョンが示された。

1. 教育目的としては、自分の住む様々な社会の中の困難な仕事を引き受ける心構えをもち、また健全な判断力をもってことを処理し得る人物の養成。
2. 学問的なものとしては、宗教、人生体験、哲学的理論や、科学など、あらゆる角度から人間関係を研究する。
3. カリキュラムとしては、出発点として人間と絶対者の肯定、行動科学主義あるいは統計学的等は手段にすぎないこと。いくつかの独立した講義ではなく、すべて同じ目的に統合されねばならない。

このようにして新学科の教育の大綱が出来上がったが、それを具体化してゆく段階において、JICE関係の先生方の絶大なる支援をいただいただけでなく、新学科の発足時点において、立教大学の沢田慶輔教授がメリット教授（初代人間関係科学科長）と共に本学に来任して創設期の困難な諸問題を解決して下さった。そこには同じキリスト教系の大学としての好意以上のものがあったと言えよう。それは、後に「教育的冒険」と呼んだ新しい教育の実践に心魂を傾ける南山短大スタッフたちの情熱が、立教大学とJICEの皆さんに伝わったと考えられるし、一方、JICEにとっても、教育現場で永年の研究成果を具体的に実践する場所と機会を得ることになったのではないかと推測するのである。

1972年（昭和47年）2月、ボルト理事長はじめ関係者によって新学科の名称は正式に「人間関係科」と決定され、文部省に設置認可を求めることとなった。同年4月、臨時教授会において、新学科の設置が承認され、「人間関係科設置準備委員会」が発足した。そして9月30日、その設置認可を文部省に申請した。これを受けて文部省大学設置審議会は4名の調査委員を現地調査のために派遣し視察を行ったが、その後、同審議会は、10月30日付けをもって「特定短大の学科についての申し合わせ」という通達によって「短期大学人間関係科について」の別項目を設けて次のように決定した。

「この種の学科については、当該学科の目的、教育課程、教員組織等を慎重に検討し、適当と判断されるものは、これを認める。

この場合、専任教員の基準は、短期大学人文学科の例（選考課程を置かない

場合入学定員100人までにつき7人以上)に準ずる。」

かくて、文部省は73年(昭和48年)1月に、上記の特別措置に基づいて、短大としては全国初の体験学習を柱とする南山短期大学人間関係科の設置を認可したのである。新学科の教育理念は、言うまでもなく「人間の尊厳のために」を基礎に置くものであるが、他大学が設置するような「人間関係学科」とせず「人間関係科」としたのは、人間関係科の教育の基礎的アプローチが、第一に学問的よりも実践的なものだからである。つまり、「人間関係について」ではなく、「人間関係そのもの」を学習者自らが主体的、体験的に学ぶことを目的としているからである。

「体験学習」と呼ぶこの学習方法にあっては、「理論から体験へ」という一般的な教育方法と異なり、まず体験が行われ、次いで、その体験についての様々な学問的意味付けや理論付けがなされるのである。この体験学習のアプローチで組まれた人間関係科の画期的なカリキュラムとそれに伴う学習方法の特徴は次の諸点である。

1. 学際的、総合的に人間関係を究明し、実践と理論との統合を行う。
2. "いま、ここで"の体験を素材にした体験学習を主要な学習法とする。
3. 学生は、自らが中心となる小グループの中で、相互援助し合いながら学習研究活動をすすめる。
4. 専門科目は、教員がチームを編成して担当し、さまざまな角度から援助してゆく。
5. 学習の場は単に授業時間内に限らず、学内外でのさまざまな活動をも学習の場とする。
6. 合宿の形で実施される学外総合学習では、通常授業で実現できない密度の高い学習や学内での学習成果の実践を行う。

人間関係研究センターの発足

人間関係科はこのようにして、当初は文字通り手探りの状態で新教育への挑戦を始めたが、新学科が漸く軌道に乗り始めた1977年(昭和52年)9月、「人間関係研究センター」が発足した。

このセンターは、人間関係科創設当初から深い関わりのあったJICEの社会人向け研修を受けた教員たちを中心にして設立され、社会人向けの研修を組織立てて行うことを目的とした。つまり人間関係科は、創設以来、学科設立の目的を見つめて学際的・行動科学的に人間と人間関係に関する研究をすすめ、実践と理論の統合を求めてきたのであるが、女子学生対象の短期大学では、年齢的・学力的に同質的、均質的な学生の教育機関としての限界、一種の限られた枠組みのようなものが感じられていた。つまり、この限定された社会での人間関係は、一般社会における人間関係とはいろいろな意味で異なるものであっ

て、短大生向けの教育がはたして一般社会人にも通用するものなのか。また教員側の姿勢や実施方法が一般社会人に対しても適切であるのか、ということが常に検討され吟味されていた。これらの反省と検討・吟味の結果、人間関係研究センターが誕生したのである。

センターの設立に先立って、スタッフの間で特に検討されたのは、センター規程の中でこのセンターの目的をどのようなものにするかということであった。そして検討の結果、センターは純粹に研究的活動に従事するのではなく、教育実践活動に研究的に取り組むことを目的とし、それを規程第2条と第3条に次のように定めた。

第2条 センターはキリスト教的人間観に立って広く学際的・行動科学的に人間・人間関係の研究および研修を行うことを目的とする。

第3条 前条の目的を達成するために、次の各号の事業を行う。

1. 人間・人間関係に関する研究と教育の推進
2. センターと目的を共通する学外研究機関との協力
3. 地域社会における開かれた大学としての諸機能を果たすために研究会・研修会等の開催および個別的相談・指導・援助等
4. 研究成果の刊行ならびに文献・資料の収集と一般への公開
5. その他、センターの目的達成のために必要と認められる事業

こうして発足したセンターは、設立当初から活発に目的を共通にする学外研究機関との交流と協力をもち、また内外の人間関係専門家を招いての「公開研究会」をはじめ「人間関係講座」を開催して、積極的に地域社会との関わりを広げていった。とくに講座は、一般社会人だけでなく、企業体や教育機関にも関心が持たれ、その要請によって講師を派遣する機会も多くなっていった。人間関係研究センターは広く地域社会に開かれたセンターとしての活動を通して、理論と実践の統合に努めてきたのである。

人間関係科教育が試みたこと

南山短期大学の創立15周年記念誌および30周年記念誌を参考に、人間関係科の創設と人間関係センター設立の経緯と目的について見てきたが、確かに、そこには「教育の冒険」と言われた南山短期大学ならではの画期的な試みが見られるのである。

もちろん、南山学園の教育がキリスト教精神に基づく教育目標「人間の尊厳のために」の具現化をめざすものであることは言うまでもない。新学科増設に際しても、「キリスト教的な人間理解に基づく人間尊厳の追及」を基礎とした学科が構想されたことは言うまでもない。そして熟慮検討の結果生まれたのが「人間関係科」であった。この新設学科の名称がなぜ「人間関係学科」でなく

「人間関係科」であったかについては前述したが、キリスト教の立場から「人間関係」をみるならば、「学科」としなかった意味がより明確になる。

「人間関係科」の学科名

周知のように、キリスト教では、一人ひとりの人間が「神の姿を写すもの・神の似姿」として創られ、この独立した人格としての人間に、神は「汝・あなた」と呼び掛けてくださると教える。神は、私達一人ひとりを「人間」という抽象的な存在としてでなく個々の具体的、主体的な存在として、そして神の具体的愛の対象として創られたのである。

キリスト教的人間観によれば、「人間の尊厳」と「人間尊重」、個々の人間の「人格」と「主体性」もまた、神の創造の業との関連においてのみ理解し得ると考える。

そして、このような人間理解に基づく人格的・主体的存在である人と人との間のいわゆる「人間関係」は、先ず、学問的研究の対象としてよりも人間の日常生活の具体的な営みの中でこそ追及され理解されなければならないのではないか、というのが新学科構想の基本にあって、「人間関係」を「学」としてでなく具体的な体験の中で学ぶ「体験学習」を主要な学習方法として採り入れ、学科名を「人間関係科」としたのである。

新学科の「体験学習」を柱とする学習方法の実施に当たって、常に求められたことは「いま、ここで」ということであった。即ち、すべての人間関係は「出会い」から始まるが、その出会いは、「一期一会」と言われるように、いつも「いま、ここで」という「具体性」と「一回性」の体験の上に成り立っている。そして、人間関係を「いま、ここで」の出会いという視点から捉える時、私達ははじめて具体的な人と人との関りを持ち得るのであるし、そこにまた、「宗教的な人間関係観」も生まれるのである。

ところで、人間の具体的・一回的な体験は主観的・非反省的なものであって、時に偏狭で自己中心的でさえある。したがってその主観的・偏狭的な枠を打破するためには、自覚的・知的反省が必要となる。個別の体験を比較・分析してより客観的な判断に導くための研究・検討が必要であり、「いま、ここで」体験的に学んだ個々の人間関係を経験とし理論付ける「理論化」が求められる。その意味で、人間関係科は創設当初から「体験から理論へ」の試みを続けて来たのである。

このことは、新学科のカリキュラムの特徴の一つが、「学際的、総合的に人間関係を究明し、実践と理論との統合を行う」とされていることにも表れている。人間関係を行動科学的に、生物学的・心理学的・社会学的に学ぶだけでなく、哲学的・宗教学的な視点からも学ぶ総合的学習を志したのである。そしてこの目的を達成するために、「チーム・ティーチング」の方法を採り入れたことは、画期的なことであった。各分野の教員が数人でチームを組み、それぞれ

専門分野を担当して一つの単元をまとめてゆくこの方法は、担当教員たちの十分な事前の研究と討論によって初めて成り立つものである。したがって、チームの教員の「スタッフ・ミーティング」と言われる事前打ち合わせ会が、毎回毎回、大変な時間と労力のもとに開かれ、時には白熱した議論を展開することもあった。

おわりに

南山大学「人間関係研究センター紀要」のための原稿依頼であったが、しかし、南山大学「人間関係研究センター」について考える時、やはり、このセンターの母体であった南山短大人間関係科の教育の方法について知ることが、同センターの活動をより良く理解することに繋がるのではないかと思われる。

南山大学人間関係研究センターの活動が、これから、より広く学際的・行動科学的に人間と人間関係について研究と研修を重ね、社会的により大きな広がりをもたせ、また地域社会にはより深い関わりを持つ活動に展開することを祈念するものである。と同時に、「実践的活動」を通して「いま、ここに」出会った人との活きた人間関係を学び研究する「人間関係科の基本姿勢」を続けることが、南山大学の「人間関係研究センター」の特色と独自性を築いて行く上で大切なことではないかと愚考し、あえて「人間関係科教育がこころみたこと」とした。

新生「人間関係研究センター」の今後の発展をこころから祈りながら。